



ふうてん学生の孤独

長谷川修



長谷川修 ● ふうてん学生の孤独



1969 年 7 月 20 日 印 刷

1969 年 7 月 25 日 発 行

定 価 / 650 円

著 者 / 長 谷 川 修

発行者 / 佐 藤 亮 一

印刷所 / 図書印刷株式会社

製本所 / 新宿 加藤製本所

発行所 / 株式
会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町 71

電話東京 (03) 260-1111 (大代)

郵便番号 162

振替 東京 808

乱丁・落丁の本はおとりかえいたします。

© Osamu Hasegawa 1969. Printed in Japan

目次

キリストの足	5
真赤な兎	21
孤島の生活	91
ヘリウム氏	143
ふうてん学生の孤独	189
あとがき	245

装
幀

山
坡
隆
一

長谷川修創作集

『ふうてん学生の孤独』

キリストの足

昭和二十年——私たちは、困難と絶望の真只中にいた。

がしかし、私たちの心は、想像されるほど暗くはなかった。私たちは来るべき破滅に対して、すでに覚悟をきめていた。むしろ外界の暗さに逆比例して、私たちの内面は、ますます明澄にさえな
って行った、と云えただろう。

私たちは前途を、私たちの言葉で云えば、投げていた。私たちはこの言葉を、たとえば「明日の
独逸語の試験は投げた」という風に使っていた。その語感には、すべてをいさぎよく投げうつ爽快
さがあって、それが私たちの気持ちにぴったりときた。だから私たちは好んでこの語を使い、全く意
味のない時にすら、この語を使った。

当時、私たちは十八か九で、旧制高校の二年生だった。

その頃、まともに授業を続けている学校は殆どなかった。学生の大半は兵隊に行くか、さもなく
ば勤労動員で軍需工場にいた。私たちの動員先は飛行機工場で、私たちはそこで『紫電改』とい
う海軍の新鋭戦闘機を作っていた。

この機種は、当時全くアメリカ側に握られていた制空権を奪回するために、さしあたりすべての
工場で作られはじめたものだった。その性能はたいそうすばらしく、その頃もうすっかり役に立た
なくなっていた『零戦』に代って、敵の戦闘機や追撃機を、かるく片附けるということだった。

実際、当時の我が方の情況と云ったら、全く情けない限りだった。

サイパン島から連日、敵B 29の大編隊が巨翼を連ねてやって来て、本土の主要都市を次々に焼き払って行ったが、それを阻止するために飛立つ我が方の飛行機とてなく、(尤も来るべき本土決戦に備えて、大量の飛行機が温存されているということだったが) 敵の小型艦載機や硫黄島から飛来する追撃機などにすら、我が本土の上空をほしいままに跳梁させていたのである。

しかしながら私たちは、この『紫電改』に期待していたわけではなかった。優秀な戦闘機が一機種出来たところで、戦局がもはやどうなるものでないことは、わかりすぎるほどわかっていた。

大体、私たちはアメリカを見くびりすぎていたのだった。緒戦の頃、私たちはアメリカなど、問題にしていなかった。アメリカと云えばスポーツ好きの、金持のぼんくら息子ばかりがいる国だと思っていたのである。

アメリカをひねるのはたやすい事だ。だがそのあとで対決しなくてはならないのは、ドイツである。結局、日本とドイツとの間で、決戦が争われることになるだろう。そしてこの東西両雄の対決で、日本はドイツに敗れる……

しかしドイツは戦いには勝つけれども、早晩ナチスは崩壊するだろう。日本は戦いには敗れるが、やがては全世界が日本を期待するようになるだろう。東が、窮極のところ西を征するのだ――

私たちは素朴にも、そんな風の妄想を抱いていた。従って日本がアメリカに負けるなど、思いもよらないことだった。第一そんな事は進化の過程に反することであり、熱力学第二法則に反するとまでは行かないまでも、歴史が逆行するように思えたのである。

「この戦争でアメリカが勝つようじゃ、世界も数世紀損をするなあ」

傲慢にも私たちはそんなことを云ったものである。私たちには進化とか、歴史というものが全く

わかっていなかったのだ。

そんなわけで、私たちは別に祖国のためにとか、悠久の大義に生きるという風の積極的な意気込みをあまり持合せていなかったが、それから大君のためにとか、天皇陛下万歳というような言葉に對しては全く冷淡であつたけれども、とにかく最後の一人までアメリカと戦うつもりでいた。

おそらく私たちの誰彼も、今すぐ特攻隊に行け、と云われて後込みする者はいなかったろう。實際、私たちはあの神風特攻隊を讚美していた。さし迫つた殲滅の運命を前にして、これほど見事な死に方はないように思われた。一人でよく数百の敵を斃す——そして殺戮は、私たちの美学ですらあつたのだ。

……声なき極東の島にうずたかく人骨がつもり、無人の戦跡にむなしい風が吹抜ける。そしてこれら死の島の上空には、雲間に亡びた民族の怨讐が、海鳴りのように鳴り響く……

私たちはと云つて悪ければ私は、そんな光景をなかば恍惚として想ひ描いた。人類はこの地上に於て、平穩に暮すことは不可能であろう。あらゆる楽天的な思想は眞実から遠い。悲劇こそ美の性格と思わねばならぬ——そして民族がそういう風に亡びるのも、また一つの見事な亡び方だろうと思ふのだつた。そんな時私には、人間の誰彼が不思議に美しく見えた。

おそらく私たちの生涯を通じて、これほどまで心の澄んでいた時期は、ほかにはなかっただろう。外界が絶望的になればなるだけ、私たちの心は虚心坦懷に冴え返つた。不必要なものは全部捨てた。何も望まなかつた。そして何時死んでもいいと思つた。食糧事情はきわめて悪く、私たちは始終腹を空かせていたし、それに空襲はひんばんだった。だが私たちの心は奇妙に冴えていた。何でもが心にじかに触れた。心が裸になっているな、と私たちは云ひ合つた。

私たちは四人で寺に泊つていた。寺と云つてもほんの名ばかりのがらんど、うな建物で、本堂に当

る処はすでに空襲の罹災者たちによって占められており、私たちはその離れの一部を貸してもらっているのだった。というのは、私たちははじめ工場の寮にいたが、そこがあっさり焼夷弾に焼かれてしまった。私たちは附近の民家や公共の建物に、三々五々分宿せざるを得なかったのである。

私たち四人は、学校の寮以来の仲間だった。すっかり気心は知れているし、それに何時一緒に死ぬかもしれないということで、おたがい兄弟のように通じ合っていた。四人とも理科甲類の、つまり大学は理学部か工学部へ進む組だった。尤もその進学が可能だとは夢にも思っていなかったが。

私たちには娯楽らしいものは何一つなかった。私たちは常に小型の文庫本をポケットにしのばせ、工場の休憩時間や作業の合間に、それらの本を取出して読んだ。作業はきわめて単調な仕事で、頭脳を使うことは更になかった。私たちはしかし、時間が徒らに失われるのを惜しんだ。そこで夜の時間を暗い電燈の下に集まり、互いに講読し合うことにした。

一人はカントールの『集合論』をやり、他の一人は『リーマン幾何』をやった。そしていま一人は、(彼はたいそう秀才だったが) ベルグソンの『笑い』を講じた。俺たちは現在、笑いを忘れたからだから、と彼は云った。

四人のうちで、私が一番気取り屋だった。私は芥川龍之介の『西方の人』を選んだ。

いずれ俺たちはキリスト教徒どもに殺されるのだから、ひとつキリストを理解してやろうじゃないか。

私のキリストに対する関心は、宗教とは全然関係はなかった。

十代のなかば、私はあのピアズリーの挿絵に惹かれてワイルドの『サロメ』を読んだが、その感動たるや全く非常なものだった。文学の絢爛たる美しさに目を眩つたのである。

次いでその『サロメ』の原典だと教えられてフローベールの『エロジ阿斯』を読んだが、これがまた私には大変な感激だった。文章の完璧な美しさというものを、私はこの外国の作家に教えられたのである。

私はフローベールに熱中した。とりわけ彼の『トロワ・コント』『聖アントワヌの誘惑』ならびに書簡集を、私は本箱の最上段に並べて置いた。この作家を描いて、ほかに傾倒する作家はないとさえ思われた。

なにかんづく、私は『トロワ・コント』を愛読した。酔うようにして一語一句音読するのである。すると何時しか彼の描いてみせた紀元三十年のパレスチナが、克明に私の頭の中に拡がった……。そういう光景の中に、私のキリストは、エルサレムの古い石畳を踏んで登場してくるのである。

私は聖書を読み、いくつかの文句を諳んじた。しかし、真に聖書に感動したわけではなかった。感動したのは常にキリストが立っている風景の方であり、あるいはそれを見事に描いてみせてくれる作家の方だった。

聖書に出てくる人物のうちで、私はとりわけペテロを非常に嫌っていた。イエスを十字架にかけた連中よりも嫌ったのだ。イエスを十字架にかけた連中には、無縁であればよい。が、ペテロに対しては——たとい地獄に落ちようと、私はペテロに反抗してやりたかった。私にはペテロが、創造に最も遠い人間の代表格であるように思われたのである。

芥川龍之介風に云えば、ペテロは要するに『永遠に模倣するもの』だった。ユダのイエスを売ったのは、ペテロおよびその一派に対する彼の反逆であったに違いない。たぶんイエスの天才はペテロには全く無縁であり、ユダの方にこそ近かったであろう……

尤もこんな風な考え方は、私たちの年齢にありがちな考え方だった。それに私はペテロのもう一

つの属性、つまり『すぐ一派を作りがる』ことにも我慢がならなかった。私には軍部もファッショも、すべてペテロに見えたのである。

他の三人が、どんなつもりで聖書を読んだかは知らない。が、聖書は私たちの間で、云わばちょっとしたブームをもたらした。

私たちは好んで聖書の文句を口に、めいめい好みの一節を抜出して壁の上に書きつけた。おそらく寺の壁の上に、(私はその寺が何宗派の寺だかも遂に知らずじまいだったが) キリストの言葉を書きつけるなど、ずいぶん妙な事だったろう。

——汝ら断食するとき、かの偽善者のごとく悲しき面容をすな。

——身を殺して魂を殺し得ぬ者どもを懼るな。身と魂をゲヘナにて滅ぼし得る者を懼れよ。

——まことに汝らに告ぐ。審判の日には、ソドム・ゴモラのかた、耐へやすからん。

実際、そんな言葉は私たちに切実だった。死は私たちの周囲で日常の茶飯事だったし、また私たちは天より落つる火にて十分に焼かれていたし、それに乏しい食糧事情のため常に断食を強いられていたからなお更だった。

何が美しいと云って、B 29の大編隊による焼夷攻撃を受けて一斉に燃え立つ都市の景観ほど見事なものはないだろう。それはまさに一大壮観と云ってよかった。火がこれほど美しいとは思っても及ばなかった。私たちは恍惚として一面の火の海にながめ入った。

そんなとき焼け出される人たちに対する同情など全くしなかった。明日は我が身にふりかかるのだ。それに焼かれて惜しいものは何もなかった。生命ですらさして惜しいとは思われなくなってい

る。私たちはローマと共に焼け亡びたネロのことを云い、こんな豪華な火の中で亡びるのなら、それもまた見事な亡び方ではないか、と思ったりした。

しかし爆弾となると、こいつはどうも無慚だった。何しろ爆弾の威力はものすごい。鉄骨がへし曲り、それへ肉片がボロ布のように叩きつけられている。あたり一面に散乱する死体は手足がちぎれ、衣類は爆風のためすっかり剥ぎ取られている。私たちは斜めにスッパリ切取られた家屋を見たが、その切口はあたかも鋭利な刃物で削がれたようになっていて、家屋の上半分は跡かたもなかった。もちろん近くに落ちた爆弾のなせるわざである。

私たちのいた工場の寮の寮長というのは予備役の大佐で、すべてを自分が指揮していなければおさまらず、私たちは彼にたいそう閉口していた。その寮長が、防空壕から頭をのぞかせているところを爆弾にやられた。爆風は彼の頭の上半分を、鉄兜もろとも持って行ったのである。おそらく彼は死の瞬間まで、持前の指揮癖を発揮していたのに違いない。

それを聞いたとき、私たちはみんな大笑いした。そしてわざわざその死体を見て行ってみたが、彼の頭は信じられないくらい小さく、まるで無脳児の標本みたいに死んでいた。それがまた私たちにはおかしくて仕方がなかった。たぶんそんな事しか笑うことがなかったからだろう。

死が日常の茶飯事になっているような時には、肉片の散乱している中に立ったところで、たいして感情が動くわけではない。そうしてみると人間の肉も、牛馬のそれと何ら変りはないと思う。

が時たま、敵の飛行機が墜落して、搭乗員の肉片が散らばっていることがある。するとその敵兵の肉片を、ものも云わず満身の憎しみをこめて踏みにじる中年の婦人がいたりして、そんな光景に接するとき、私たちはむしろ同胞の肉片の中に佇んでいる時よりも切実に、戦争というものを実感するのだった。

私の解釈では滑稽は残酷と表裏一体であつて、敵飛行士の死体がやや満足な形で投げ出されてい
ると、必ずと云つてよいほどその両眼から、二本の竹が突き出ていた。私はそれを、たいへん滑稽
に思つたのである。

ある日のこと、仲間の一人が靴を拾つてきた。

彼はそれを、私のために拾つてきたのだと云つた。というのは、私の履いている靴の片方はパツ
クリと大きく口をあけていて、私はそれを針金で縛りつけていたが、毎日ほとんど日課のように、
ベンチでもつてそいつを締め直す必要があつたのである。

見ると、それはアメリカ兵の靴だった。B 29が墜落して、その乗員の靴が放り出されたに違いな
かつた。

「ほほう、舶来ものだな。だけどまた、いやに馬鹿で、つかいなあ」

しかし私はそれを手にしたとき、彼がそいつをわざわざ拾つてきた理由がわかつた。そのずっし
り重い靴には、中身がつまっていたのである。

だが、そこで私が叫び声をあげて放り投げでもしたら、それこそ彼の筋書にはまつてしまうこと
になる。私はことさら平静をよそおい、しごく平然と紐を解いて、靴の中身を取り出した。踝くるぶしのこ
ろからちぎれた足である。

そのアメリカ兵の足は、すばらしく美しかった。切口の肉が内側にまくれ込んでいるが、血はす
っかり出つくして蠟のように透きとおり、それに恐ろしいほど清潔だった。人間の生身の足がこん
なに美しい筈はなかつた。この清浄な美しさは、おそらく死がもたらしたものに違いない……

それにしても、足というものがこんなに美しいものだとは、これまで思つてみたこともなかつた。

私は見事な彫刻でもながめるように、掌にのせてそいつにながめ入った。

もしそれが、私の掌に余るほど大きくなかったら、私はそれをギリシャ彫刻のヴィナスの足だと思ひ込むに、何ら躊躇しなかったろう。そして私はその足に、むしろ恍惚として唇を近づけたことだろう——実際、それは唇を近づけたくなるほどに美しかったのだ。

私はその足を、銀の盆の上にのせてながめてみたかった。清潔で幾分しなびているその黄土色の足は、銀の盆の上では、さぞかし輝くばかりに美しく見えることだろう。

もちろんそんな私には、バプテスマのヨハネの首の連想があった。

……私はそういう連想のうちに、厳肅な感動におののきつつ聖体に接吻くちづけしているキリスト教の僧侶たちを想像したのだった。するとその僧侶たちの中に、背が高く、ガニ股の、独特の歩き方をする一癖ありげな坊主がいて、その顔は名優ルイ・ジューヴェに似ているのだ。彼は目をギョロつかせながら、

「おのおのがた、主エス様の、御足みでござるよ……」

私の耳には、そういうルイ・ジューヴェの声が聞えるように思った。そこで私は思わず、にんまりと笑ったのである。

私は違い棚の上に白墨で盆の絵を描き、その上へ足をのせておいた。

すると仲間の一人が、それへナイフとフォークを描きそえた。なるほどそうして見ると、皿の上に足の料理がのっかっているように見えた。

ホワイト・ソースをかけた足料理。そいつはとてもよく料理してあるのでたいそう柔らかく、それにナイフを取って切ってみると、まるでチーズでも切るようにスカスカ切れる……